



北米日本庭園協会カンファレンス 基調講演要旨
2014年10月18日 シカゴボタニカルガーデン

京の庭師の精神

～ 伝統から学ぶ、仲間から学ぶ ～

Learn from the tradition, learn from the team

植彌加藤造園株式会社 代表取締役社長 加藤友規

概要

1200年を超える歴史の中で発展を遂げた日本の古都 京都。国の名勝庭園の2分の1が集中する世界屈指の庭園都市・京都にて、先祖代々京都の庭を育み続ける庭職人集団 植彌加藤造園株式会社がある。このプロの職人集団を率いるのが 8代目代表取締役社長 加藤友規。本プレゼンでは、何百年以上にわたって庭園を育んでいく際の長期的な維持管理のあり方に焦点をあて、1世紀以上の歳月をかけて庭の情景を育む京都の庭師の仕事を紹介する。加藤の庭園哲学のひとつに、「庭師200年論」がある。生きた総合芸術である日本庭園は壮大すぎて、完全に理解するのに限られた人間の人生では短すぎるという。これは驚くことではなく、本物の庭師になるには200年、あるいはそれ以上かかると加藤は語る。だからこそ、生涯かけてそれに取り組む価値があるのだ。

庭が出来上がる瞬間は大きな感動を与えてくれるが、それは完成でなく誕生であり、そこが庭師のスタート地点である。京都の庭師の伝統において、庭は「作庭四分、維持管理(メンテナンス)六分」というが、私の哲学は「作庭四分、育成(フォスタリング)六分」である。「メンテナンス」というと、一般的には伸びた枝を切るだけの現状維持型の作業をイメージしがちである。しかし「育成(フォスタリング)」とは、日々の行為を通じて景色を育むことを意味する。言い換えれば、新しい価値を加えていく作業である。新しい価値を加えるとは、単に設備を追加するという意味ではなく、子供を育てるように、時間をかけて愛情や情熱を注ぎ慈しみながら、新たに生まれた庭を成熟した景色へと育てていくことである。そして、庭に従事する庭師も、鑑賞する人や施主と共に、庭の真の美意識や感性を学び成長していく。だからこそ私は、作庭以上に「育成(フォスタリング)」に重点を置き、庭師の仕事の真髄はこの「育成(フォスタリング)」にあるという。100年庭園の「育成(フォスタリング)」のケーススタディーとして、無鄰菴、對龍山荘の2つの例をあげる。また新たな施主のもと大胆に生まれ変わった岡崎邸と星のや 京都も100年庭園の修復事例として紹介する。

本物の庭師になるための秘訣はなにか？ 私が一番大切にしていることは「伝統から学ぶ、仲間から学ぶ」である。叶うものならば、14世紀の夢窓国師や17世紀の小堀遠州など偉大な先達に実際に会い、彼らが造った南禅寺の庭が、今、私の元でどのように育成されているか様子を見てもらい語り合いたい。しかし現実には叶わない。その代わりに、11世紀の「作庭記」など、貴重な記録財産から学ぶことはできる。また、遠い時代の先達とは語り合うことができなくても、同じ時代に生きる仲間とは思う存分語りあえる。「庭師200年論」(本物の庭師へなるには200年要する)の時間軸から考えれば、本物の庭師になるのに、自分だけの体験しか蓄積されない人間ひとりの人生では短すぎる。だからこそ、仲間が体験し知り得た知識や理解を自分の経験として蓄積できるよう共に学び合うことが求められる。造園業界に関わるすべての人は皆仲間であり、その仲間と時間や知を共有し多様な体験を生きるべきである。

最後に京都府三代目知事北垣国道の「楽百年之夢(100年の夢を楽しむ)」という言葉を紹介する。北垣知事は、多くの方は100年生きられないが、未来に生きる我々のために何かを残したいと思い琵琶湖疏水事業に臨んだ。そして100年たった今、我々はその恩恵を受け、庭園内には疏水の豊かな水が流れ込み京都一の景色を生み出し、時を越え彼の夢を楽しんでいる。人生には限りがあるが、それぞれの世代、それぞれの時間はどれも価値があることを教えてくれる。我々は北垣知事と同じように「100年の夢」を

楽しみながら、庭を育むべきである。このプレゼンテーションで京都の庭師の精神を共に学び、北米の仲間である皆様と共に楽しみたい。

目次

1. 自己紹介

- ・「京の庭 育み続けて 160 年」
- ・70 人の社員と共にとともに歩む楽しい日々

2. 私の哲学

- ・完成ではなく、誕生
- ・維持管理(メンテナンス)ではなく、育成(フォスタリング)
- ・「作庭四分、育成(フォスタリング)六分」

3. 情景を育む -人為でも自然でも、美しいものは伝統となり受け継がれていく-

- ・人為的な美 「慈照寺(銀閣寺)」の向月台と銀沙灘にみられる庭師の作為が付加された事例
- ・自然な美 「西芳寺(苔寺)」など枯山水の庭から苔の庭へと自然に遷移した事例

4. 日々の仕事 100 年庭園育成

- ・無鄰菴:時代の感性を読み取る(東山の借景・芝生広場)
- ・對龍山荘:敷地内外の協力のもとで育まれる情景

5. 蘇る 100 年庭園 -世界に愛される京都の日本庭園-

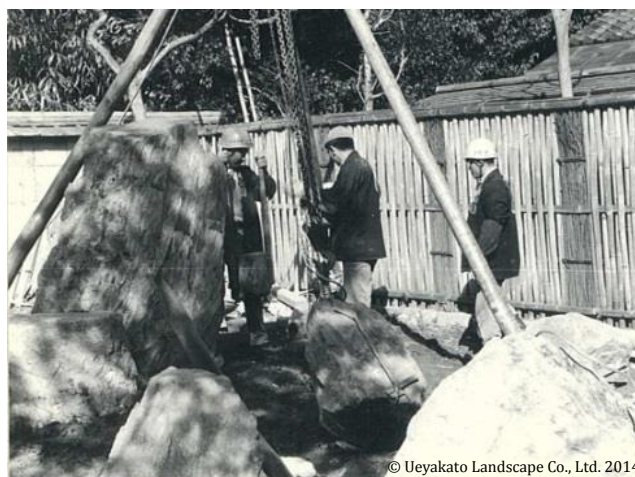
- ・岡崎邸
- ・星のや 京都

6. 時空を繋ぐ庭師の精神

- ・伝統から学ぶ、仲間から学ぶ
- ・「楽百年之夢(100 年の夢を楽しむ)」



1966 年 南禅寺小方丈庭園「如心庭」作庭時



1967 年 南禅寺「六道庭」作庭時

1. 自己紹介

京の庭 育み続けて 160年 / 70人の社員と共にとともに歩む楽しい日々

植彌加藤造園には、伝統的な庭師や設計デザイナーはもちろんのこと、公園の運営・マネージメントに携わる学芸員など、多種多様な人材がおり、各現場で活躍している。彼らは私にとって、家族同様の大切な仲間であり、財産である。



2. 私の哲学

完成ではなく、誕生 / 維持管理ではなく、育成 / 「作庭四分、育成(フォスタリング)六分」

作庭工事が竣工した時、私は「完成」という言葉は使わない。それは、庭というひとつの命が「誕生」したことをいう。作庭は限られた工期の中でヒト、モノ、カネなどさまざまなエネルギーを投じていくので、竣工時の感動はひとしおである。しかし、そのときは庭の「誕生」を祝う一瞬の喜び、一瞬の感動であり、そこから庭のガーデンライフがはじまるのである。まさにそこが庭師のスタート地点であり、多くの愛情を注ぎながら、何十年何百年の歳月をかけてメンテナンスが続く。それをひと言で示す言葉「作庭四分、維持管理六分」は、京都の庭師が昔から大切にしてきた哲学であり、これは作庭よりも維持管理の方が、つまり、作ること自体よりも作った後の方が、より重要であるという戒めの言葉でもある。もちろん私も、京都の先人たちが培ってきたこの法則に賛同する。しかし、私は維持管理(メンテナンス)という言葉を使わず、「作庭四分、育成(フォスタリング)六分」という言葉に置き換えたい。生まれたばかりの赤ん坊のような庭の景色を長い歳月をかけて美しく育てていくこと。庭師の仕事の真髄はこの育成(フォスタリング)にあるといえる。

3. 情景を育む -人為でも自然でも、美しいものは伝統となり受け継がれていく-

伝統的な考えや技法を守りながら新たに創造的なものを付加し、それがその時代に共感・感動されることで伝統になり受け継がれていくことを「伝統を創造する」という。ここでは、そんな「伝統を創造する」庭師の仕事の面白さを語る。事例としては、白川砂で造形された向月台・銀沙灘で有名な「慈照寺(銀閣寺)」と、「Moss Garden」として海外でも有名な西芳寺の情景の変遷を取り上げ、時を越えて育まれる情景の醍醐味に迫る。

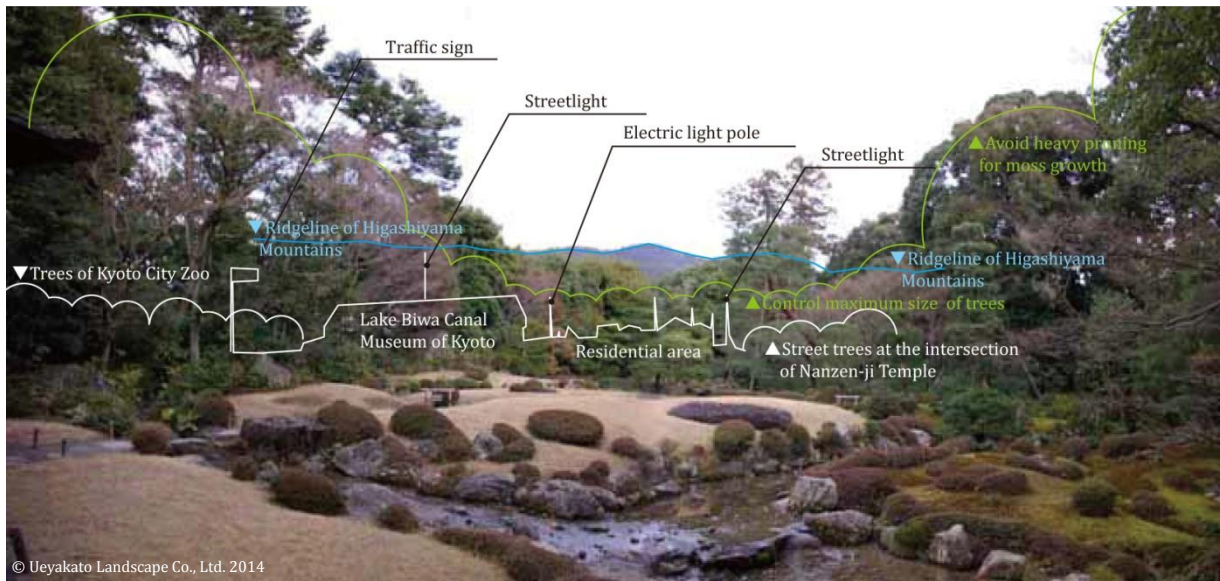
- ・人為的な美 「慈照寺(銀閣寺)」の向月台と銀沙灘にみられる庭師の作為が付加された事例
- ・自然な美 「西芳寺(苔寺)」など枯山水の庭から苔の庭へと自然に遷移した事例

4. 私の日々の仕事 - 100年庭園の育成 -

人間の人生と同様、庭園は長い歳月の中で様々な出来事に出会い、また様々なオーナーのもとへ渡り波瀾万丈の時代を歩むこともある。ここでは、修復剪定で蘇る100年庭園の情景の育成管理と、新たな施主による修復工事で蘇る100年庭園をケーススタディーとしてとりあげる。

100年庭園の育成管理(フォスタリング)

- ・無鄰菴:時代の感性を読み取る(東山の借景・芝生広場)
- ・對龍山莊:敷地内外の協力のもとで育まれる情景



無鄰菴:時代の感性を読み取る(東山の借景・芝生広場)



對龍山莊:敷地内外の協力のもとで醸造される情景

100年庭園の修復工事

- ・岡崎邸
- ・星のや 京都





6. 時空を繋ぐ庭師の精神

最後にハイテク時代に生きる庭師の心得について述べる。便利さは増す一方、暮らしの中で自然と向き合い感性を磨いてきた昔にくらべ、自然を感じ取る感覚、敏感さや感性は衰えつつある今、意識して自然と向きあわなければならない時代になった。これは庭師にとって大きな時代の転機でもある。

「伝統から学ぶ、仲間から学ぶ」

そんな現代に生きる我々が、次世代に継承すべき京都の庭師の精神とはなにか。まずは、伝統から学ぶことである。1200年の京都の歴史を重んじ、何十年何百年と自然と向き合う時間軸の中に生きること。過去に生きた庭師の意思を現地現物で感じ取ること。そして次に、共に情景を育む「仲間から学ぶ」こと。ここでいう「仲間」とは、まずは職場の仲間である。植彌加藤造園では、老若男女を問わず、みんなが先生であり生徒でもある。毎日15件ほどの現場が進行している中で、自分自身が携わる現場だけでなく、仲間が携わる現場からも実体験に近い学びができるように、チームワークを大切にしている。社内の仲間の次に学ぶ仲間とは、官・学・産すべての造園関係者である仲間のことである。謙虚に他人から学ぶ姿勢こそ、志ある庭師には必要不可欠なのである。

私はよく「庭師になるのには、何年かかるか？」と質問を受けることがあるが、「本物の庭師になるには、200年」と答えている。この「庭師200年論」は、人間の命(ヒューマンライフ)よりも、庭の命(ガーデンライフ)の方がはるかに永いという事実を謙虚に思えば、当然の答えである。それ故、人間の寿命の中で、完璧に庭を理解したと語るのは、おこがましいことである。庭は、深淵なる生きた総合芸術であり、だからこそ楽しく学びがいのあるものである。庭師として謙虚に成長し、すばらしい情景を未来へ繋いでいく極意は「伝統から学ぶ、仲間から学ぶ」に隠されている。

100年の夢を楽しむ - 楽百年之夢 -

私の地元南禅寺界限に琵琶湖疏水工事が開始されたのは明治18年(1885)のこと。当時、事業を推進した京都府第三代目知事の北垣国道が残した言葉に「楽百年之夢(100年の夢を楽しむ)」がある。私の大好きな言葉でもある。現在、琵琶湖疏水工事が竣工してから約124年の歳月が経過したが、我々は過去からの恩恵を受け、南禅寺界限の別荘庭園には豊かな疏水の水が流れ込み、京都一と言っていい美しい情景を生み出している。100年前に描いた北垣知事の夢を我々は楽しみながら、情景を育むことができ、大変幸せである。過去を尊び、今と向き合い、100先の夢を楽しむ。異国の地、北米において日本庭園の情景を育む仲間である皆様とも「100年の夢」を分かち合い最後のメッセージをおくりたい。

夢之年百楽



"We are the team, Let's learn together"